



日本における身体拘束の現状 国際調査の必要性

パトリック・サベジ(Ph.D.)

特任准教授・慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス

2018/11/16・厚生労働省記者会見

故ケリー・サベジ (弟) (1989.12.27～2017.5.17) (27歳)



ALT の工作中(鹿児島県志布志市の小学校、2016.11.4)

「理想的な先生」(ニュージーランド駐在日本大使)



The New Zealand Herald

Young Kiwi tied to bed for 10 days

'Why did he die?'

Kelly Savage died in Japan after being restrained for 10 days in a mental health facility.



Tess Nicol

A young Kiwi living in Japan died after having his legs and waist strapped to a bed in a psychiatric ward for 10 days without release, his family say.

Kelly Savage died in Yamato City Hospital on May 17, a week after suffering a heart attack and more than two weeks after he was hospitalised for mental health issues.

The 27-year-old's family are fighting for access to his medical records, after hospital officials denied saying he had been restrained for so long.

His mother and brother, Martha and Pat Savage, have spoken to the *Herald* about his death in the hope international attention on Japan's use of restraint on mental health patients will help force change.

"They're sick, they're not criminals," said Martha. "They need care and help."

The Ministry for Foreign Affairs and Trade (Mfat) confirmed the New Zealand Embassy in Tokyo had been providing consular assistance to the Savage family.

Correspondence between Mfat and the family also showed Mfat offered to help where it could with access to Kelly's medical records.

Kelly, from Wellington, had a history of mental illness and had previously been hospitalised in New Zealand.

But he'd recovered and was enjoying life in Japan as an English teacher, where

Rules around restraint

- The United Nations Convention Against Torture, which Japan has ratified, says use of excessive restraint is a breach of human rights which must only be used as a last resort, and should be removed as soon as possible.
- However, there are no exact guidelines about how long is too long or when restraint must be lifted.
- A recent report into seclusion and restraint practices in New Zealand linked restraint to an increased risk of death and physical harm, including blood clots.

he'd lived for nearly two years.

Then, in April this year Kelly began acting in a paranoid manner, lashing out and behaving in increasingly bizarre and concerning ways.

He went to stay with his brother Pat, who also lives in Japan.

Pat, 32, organised for Kelly to go into medical care in the hope it would be the first step to recovery. "I was really worried that something was going to happen to him, so I was trying to protect him and do what was best for him."

But on May 10 Kelly's heart stopped beating for nearly an hour.

He was rushed from Yamato Hospital, where he had been receiving psychiatric care, to Yamato City Hospital for treatment,

but he never recovered from the extensive brain damage caused by the cardiac arrest.

A week later he suffered another cardiac arrest and died.

His cardiologist, Dr Kei Miyagishima, suspected the first heart attack was a result of a pulmonary embolism caused by deep vein thrombosis (DVT).

DVT is a common affliction of patients who have been restrained for long periods of time and can cause blood clots.

Although the autopsy was inconclusive, medical records seen by the *Herald* show Miyagishima suspected pulmonary embolism as a result of Kelly's long restraint, given several pieces of evidence including his blood pressure and oxygen levels.

In a meeting with Kelly's psychiatrists at Yamato Hospital after his death, Pat and Martha say they were told that, apart from releasing his arm restraints at meal times, Kelly was never fully unrestrained from the bed he was strapped to.

However, in a letter sent to the family by Kazuhiko Ishii, director at Yamato Hospital, and translated into English for the *Herald*, it was claimed "the physical restraint was stopped at suitable times, and it was limited to the times when physical restraint was necessary".

Ishii denied the hospital was responsible for Kelly's death.

The *Herald* has contacted both hospitals but had not received a response by edition time last night.

'Dream job' in Japan A3

The New York Times

The Washington Post

theguardian

the japan times

朝日新聞

讀賣新聞

THE YOMIURI SHIMBUN

など。。。

2017.7.13

精神科病院での身体拘束「しっかりと調べて対処」 - 塩崎厚労相

2017/7/21(金) 18:00配信



身体拘束の実態を把握した上で、対策を検討するとの考えを示した塩崎厚労相（21日、厚労省）

医療
介護 CBnews

YAHOO! ニュース
JAPAN

2014年

「医療事故調査制度」 医療法修正

医療事故調査制度の施行に係る検討会 構成員の背景

医療事故調査制度検討会の委員を入れ換え

「事故」かどうかの判断は、事故を起こした病院が決める

という修正を入れた政治家：



橋本 岳（衆議院議員）
厚生労働政務官



石井 みどり（参議院議員）
参議院厚労部会委員長

「診療行為に関連した死亡の調査の手法に関する研究班」研究班員		○			
政治的配慮で再構成された「医療事故調査制度の施行に係る検討会」構成員		△			
日程調整まで予定していたのに検討会構成員を外された実績と識見ある研究班員				☆	
橋本岳・石井みどり氏によって差し替えられて検討会に入った構成員				★	
事故の原因究明に否定的な日本医療法人協会「現場の医療を守る会」世話人					●
氏名	所属				
後 信	医療機能評価機構医療事故防止事業部長・産科医療補償制度運営部技監	○		☆	
木村 壯介	日本医療安全調査機構中央事務局長	○		☆	
樋口 範雄	日本医療安全調査機構常任理事	○		☆	
長尾 能雅	日本医療安全調査機構中央審査委員会常任委員	○		☆	
山口 徹	日本医療安全調査機構顧問	○		☆	
児玉 安司	医療側弁護士・新皇総合法律事務所	○		☆	
鈴木 利廣	患者側弁護士・すずかけ法律事務所	○		☆	
今村 定臣	公益法人日本医師会常務理事	○	△		
葛西 圭子	公益法人日本助産師会専務理事	○	△		
河野龍太郎	自治医科大学医学部医療安全センター長	○	△		
堺 常雄	一般社団法人日本病院会会長	○	△		
瀬古口精良	公益社団法人日本歯科医師会常務理事	○	△		
高宮 真樹	公益社団法人日本精神科病院協会常務理事	○	△		
土屋 文人	公益社団法人日本薬剤師会相談役	○	△		
豊田 郁子	新葛飾病院医療安全対策室セーフティマネージャー	○	△		
永井 裕之	患者の視点で医療安全を考える連絡協議会代表	○	△		
西澤 俊寛	公益社団法人全日本病院協会会長	○	△		
福井トシ子	公益社団法人日本看護協会常任理事	○	△		
松原 謙二	公益社団法人日本医師会副会長	○	△		
宮澤 潤	宮澤潤法律事務所弁護士	○	△		
有賀 徹	全国医学部長病院長会議「大学病院の医療事故対策委員会」委員長	○	△		●
加藤 良夫	南山大学大学院法務研究科教授・弁護士		△		
山本 和彦	一ツ橋大学大学院法学研究科教授		△		
山本 隆司	東京大学大学院法学政治学研究科教授		△		
米村 滋人	東京大学大学院法学政治学研究科准教授		△		
鈴木 雄介	鈴木・村岡法律事務所弁護士・医師		△	★	
柳原 三佳	ノンフィクション作家		△	★	
和田 仁孝	早稲田大学法科大学院教授		△	★	●
大磯義一郎	浜松医科大学医学部教授・医師		△	★	●
小田原良治	一般社団法人日本医療法人協会常務理事		△	★	●
田邊 昇	中村・平井・田邊法律事務所弁護士・医師		△	★	●
橋本 岳	厚生省政務官				●
石井みどり	自民党 副幹事長				●

<http://www.yuki-enishi.com/enishi/enishi-2017-08.pdf>

世界 3 1 人の精神科医からの書簡

- 「日本の身体拘束の平均期間は他の先進国に比べて非常に長い。。。肺血栓塞栓症による。。。死を引き起こしている」
- 「国際委員会を組織し、国際的なレベルで日本の精神医療の質を世界水準に見合うよう改善すべく、委員会の提案を仰ぐべきだ」



筑波大学
University of Tsukuba



COLUMBIA UNIVERSITY
MEDICAL CENTER



HARVARD
MEDICAL SCHOOL



香港中文大學
The Chinese University of Hong Kong

厚生労働省からの連絡（2018・4・18）

- 「ケリー・ロバート・サベジ様への身体拘束については、精神保健福祉法に基づいて適切に対応されていた」
- 「大和病院が、大和市立病院における死因を踏まえ、死因と身体拘束の因果関係はないと判断しており、同制度による調査は実施されていない」
- 「精神病床における隔離や身体的拘束に関する調査のあり方については、。。。現在も引き続き検討がなされている」

10日間連続身体拘束、肺梗塞の疑い

フローシート								フローシート 経過観察			
00 (日)	01 (月)	02 (火)	03 (水)	04 (木)	05 (金)	06 (土)	07 (日)	7 (日)	8 (月)	9 (火)	10 (水)
病室	特隔1号室	特隔1号室	特隔1号室	特隔1号室	特隔1号室	特隔1号室	特隔1号室	特隔1号室	特隔1号室	PICU号室	仮病室号室
医師											
時間	08:00~										~21:45

カルテ(大和病院)

#3、深部静脈血栓症 (Deep vein thrombosis)、肺梗塞 (Pulmonary embolism) の疑い

カルテ(大和私立病院、心臓病専門医)

精神科指定医の意見書： 「法律が守られていなかった」

平成29年9月4日

日本精神神経学会専門医・指導医

いずみの杜診療所

山崎 英樹

意 見 書

ケリー・サベジ氏に行われた医療法人正史会大和病院の治療について意見を求められたので、次のとおり意見を申し述べる。

【結論】

平成29年4月30日15時10分から同年5月10日21時45分まで継続された身体拘束は、精神保健及び精神障害者福祉に関する法律（以下、精神保健福祉法）第37条第1項の規定に基づく厚生大臣が定める処遇の基準（以下、37条1項基準）が守られていなかったと考えられる。

【理由】

理由（1）：37条1項基準が定める身体拘束の対象に該当しない精神状態となっても、身体拘束が漫然と行われることが常態化していたと考えられること。

肺血栓症による死亡他にも確定

急性肺血栓塞栓症に係る死亡事例の分析

平成29年 8 月

医療事故調査・支援センター
一般社団法人 日本医療安全調査機構

事例 7 精神科

- ・統合失調症、希死念慮のため医療保護入院とされた 40 歳代の患者。BMI 27
- ・自傷行為予防のため四肢体幹拘束を施行。向精神薬服用中。
- ・体幹拘束中は弾性ストッキングを着用。入院 5 日目に胸痛があり心電図検査で異常所見があった。症状が消失したため経過観察。入院から約 3 週間後、開放観察開始の 30 分後、トイレで倒れているところを発見され、救命処置を行うが、心拍再開せず死亡。解剖により、急性肺血栓塞栓症と診断。

事件番号 : 平成 17 年(ワ)第 1285 号
事件名 : 損害賠償請求事件
裁判年月日 : H19. 11. 13
裁判所名 : 京都地方裁判所
部 : 第 6 民事部
結果 : 一部認容
登載年月日 :
判示事項の要旨 : 精神科病院に入院していた患者が身体行動抑制下での点滴中に肺血栓塞栓症により死亡した事案において、平成 15 年 5 月 1 日当時、被告病院医師及び看護師に精神科に入院する患者について、肺血栓塞栓症が発症するとの認識を持ち得る可能性があったとまで認められないとして、同認識予見すべき義務違反などを否定して死亡を前提とする損害賠償請求が棄却された事例。

精神科病院では、患者との意思疎通が困難な場合や身体行動抑制する場合があり、その治療にあたって患者の人格、家族との円滑な関係に配慮が求められるところ、被告病院の看護師には、かかる配慮を欠く行為が認められるとして損害賠償請求の一部が認められた事例。

主 文

- 1 被告は、原告 A に対し、82 万 5000 円、原告 B に対し、27 万 5000 円及びこれらに対する平成 15 年 5 月 1 日から支払済みまで年 5 分の割合による金員を各支払え。

8千人以上の署名 (change.org) (goo.gl/CVtrTF)

息子の死を無駄にしないために日本の精神科医療の身体拘束を見直してください。



8,389 人が賛同しました。もう少しで
10,000 人に到達します！



渡邊 由香さんが賛同しました



金井 久美子さんが賛同しました



息子の死を無駄にしないために日
本の精神科医療の身体拘束を見直...

 Facebookでシェア

2017. 12. 8
南日本新聞

10日縛られた末死

精神科身体拘束

ケリーさん（志布志の死を教訓に）

志布志市の英語指導助手（A

LT）のケリー・サベジさん（27）が5月に急死した。そううつ病の症状が悪化し兄の住む神奈川県の精神科病院で10日間、身体拘束されたまま意識不明となり、7日後だった。なぜ死に至ったのか。海外メディアにも報じられ、故郷ニュージーランド政府が日本に情報提供を求めるなど国際的な注目を集めている。身体拘束の実態を見つめ、こうした悲劇をどうしたらなくせるかを探る。（編集委員・豊島浩一）



ケリー・サベジさんの死を報じるニュージーランド紙

「なぜ」家族や友人無念

1

突然の別れ



志布志市内の小学校で授業するケリー・サベジさん
11月2016年11月

11月22日夜、志布志市の中国語講師・西岡雅博さん（61）宅に、A LTや外国語を学ぶ地元住民ら十数人が集まった。2カ月に1回ほど開く懇親パーティー。ケリーさんも生前よく参加した。彼は子供が大好きで、いつも子供が集まってきた。楽しそうな姿が目につかふ。亡くなったことが今も信じられない。西岡さんやA LT仲間

は口をそろえる。突然の別れから半年余り。悲しみは癒えない。ケリーさんは2015年8月から今年4月まで志布志市で働いた。3月ごろ精神的に不安定になり、休養を取って兄パトリックさん（32）の家に滞在していた。

入院すると、すぐに両手両足と胸をベッドに縛られた。身体拘束は本人に自殺など命の危険があるとき法的に認められる。しかし志布志市のA LTで、米出身のジョング・クレイさん（27）は納得できない。「命を守る拘束なら、なぜ死んだのか。ケリーは苦しめて縛り続けたのか。10日連続なんて米国では考えられない」

亡くなってから11日後の5月28日。遺族を迎え、志布志市で二つ

の「し」
れた。一
ん宅で
宮崎の
友人ら
午後
主催で
1さん
小中学
係者や
者が献
ドで授

2017. 6. 27
南日本新聞
子供のうた

南 本 新 聞

2017年(平成29年)6月27日

子供のうた

(学年は投稿時)

天国のケリー先生へ

よう日や天気

すう字や色

くだものややさい

いろんなえい語を 教えてくれた

やさしくて いつもニコニコの

ケリー先生が 大好きです

そんな先生のおかげで

えい語も大すきになったよ

これから 天国から

見まもつていてね がんばるから

(志布志市原田小3年

えの さくら)

